

平成30年6月12日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03981

研究課題名(和文) 自己肯定感に注目した子どもの「貧困に抗う力」育成のためのサポートシステムの構築

研究課題名(英文) Building the support system for the resilience against child poverty focusing child's self-esteem

研究代表者

埋橋 孝文 (UZUHASHI, Takafumi)

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：60213427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は次の4つからなる。

1. 「子どもの貧困への総合的アプローチ」を明らかにし、親の貧困から貧困が子どもに及ぼす悪影響までの経路とステージを明らかにした。2. 子ども自身に対して福祉や教育がどのような対応が可能であるかを深く追求し、「自己肯定感」や「レジリエンス」を育むような働きかけが重要であることを明らかにした。3. アンケート調査「京都子ども調査」の分析を通して、子どもの自己肯定感には親や家族、学校の先生、友人などの、人との関係が大きな影響を及ぼすことを明らかにした。4. 妊娠・出産期に始まり、保育、教育、児童養護の各場面での「子どもへの対応」の具体的方法を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The main outcomes of this research are as follows.

1.The systematic and wholistic approach to child poverty are clarified, which makes it possible to manipulate the effective policies against child poverty. 2.To nourish the child's self-esteem and resilience is necessary at schools and welfare facilities. 3.Social network for children is crucial to grow the self-esteem of children. 4.Concrete know-how to deal with child poverty in the schools and welfare facilities are clarified.

研究分野：社会福祉学

キーワード：自己肯定感 レジリエンス 子どもの貧困への総合的アプローチ

1. 研究開始当初の背景

今回の科学研究費のプロジェクト「自己肯定感に注目した子どもの『貧困に抗う力』育成のためのサポートシステムの構築」(代表者・埋橋孝文, 2015~2017年度)を, 前回の「貧困に対する子どものコンピテンシーをはぐくむ福祉・教育プログラム開発」(2011年度~2013年度)と区別して, 私たちはそれを科研シーズン2と呼んでいる。

科研シーズン1からシーズン2に持ち越された検討課題がいくつかある。

第1は, シーズン1では自己肯定感が「貧困/不利/困難に負けない力」の基礎にあるものとして捉えたが, それは実証的に支持されるのか, あるいは, 自己肯定感の大小を決めるのは何か, 自己肯定感を高めるにはどのようにすればいいのか, という問題である。

第2は, シーズン1が「貧困/不利/困難に負けない力」という概念を策定し, それをレジリエンスの一つとしてとらえたことに関連する。「貧困/不利/困難に負けない力」を教育的および福祉的働きかけの対象と目的と設定する場合でも, 各種リスクに負けない「力」を事前的に育成することとリスクに遭遇したことによる負の影響から事後的に回復する「力」を培うことの2つを区別すべきではないか, という問題が存在する。そして区別をしつつ, それぞれの「力」を具体的にどのようにして育てていくべきかを明らかにする必要がある。併せて, 「親の貧困」と「子どもの貧困」との関係を明確にするという課題もある。

2. 研究の目的

私たちの科研シーズン1が「子どもの貧困を考える」ことを目的としたのに対し, 科研シーズン2は「子どもの貧困問題の解決策を探る」ことを主たる目的としている。シーズン1と異なって予算規模が小さいこともあり, この目的を達成するために, あまり問題が広がり拡散しないようにいくつかのリサー

チ・クエスチョンを設定し, それに答えていく形で解決策を探っている。

RQ1 子どもの貧困はどのように表れ(現象し), どのような問題や困難をもたらしているか。

RQ2 (福祉や教育は)子どもの貧困にどのように対応してきたか, 対応してこなかったか(つまりこれまで)。

RQ3 現在どのような取り組みがあり, その効果は如何, どのような方向, 改善が望まれているか。

RQ4 子どもの自己肯定感あるいはレジリエンスを高めるためにどのような働きを行っているか(行っていないか), 今後どのような対応をすべきか。

3. 研究の方法

今回の科研シーズン2の研究手法とその特徴は, 第1に, アンケート調査によって子どもの自己肯定感やレジリエンスに影響する要因を多変量解析の手法で明らかにしたことである。

戦後から1960年頃までは貧困は福祉や教育にとっての大きな課題であったが, その後, 貧困の問題は後景に退いた。今, 子どもの貧困が大きな注目を集めても福祉や教育の現場でどのように対応すべきかをめぐって, あまり多くの知見の蓄積はみられないのが現状である。ただし, そうはいつでも日々の実践の中で積み重ねられた貴重な知見があるはずである。インタビューを通して, そうした「埋もれた, このままでは忘れ去られかねない, 貴重な実践事例」を掘り起こしたことが第2の特徴である。

とりわけ, 子ども時代を振り返る回顧的インタビュー調査で, 教師や福祉関係者から掛けられた言葉(「貧困はお前たちの責任ではない, 恥ずかしく思うことなんか無い」など)が子どものその後の生活に大きな影響を及ぼしていることがわかった。そうした教師や

福祉関係者の「働きかけの言葉」を掘り起こしていったことが、それが本研究の「エビデンス」になった。

4. 研究成果

私たちは「親の貧困」と「子どもの貧困」を区別しているが、そのことは両者が無関係であることを意味するものではない。むしろ逆で、いったん両者を区別してこそ、2つの貧困の密接な関係に迫り得るのである。科研シーズン1とシーズン2を区別するものは、シーズン1では明確ではなかった親の貧困と子どもの貧困の関係を明確にしたことである。

図1は親の貧困から子どもの貧困へと至る3つの経路（で示される）および「親の貧困」、「子どもの貧困」、「子ども自身（への影響）」という3つの段階（ステージ）から構成されている。この図そのものは今後のあるべき政策や対応をそれ自身示すものではなく、あくまでも、複雑に絡み合った複雑な事象をいくつかの「プロセス」に分けることで解きほぐし、理解を容易にする狙いをもつ。その上で、一連の流れのなかの各ステージと各経路において必要でかつ実施可能な政策的対応を明示している。

図1の一つの大きな効用は、子どもの貧困への政策的対応の整理が可能になることである。それぞれの経路とステージごとに実施される施策を分類し、また、それらが予防・事前ケアかどうか、それとも事後ケアかどうかによって、あるいは金銭的支援かどうか、サービスによる支援かどうかによって分類することができる。

図1によって「子どもの貧困に対する総合的なアプローチ」がどのようなものかが浮き彫りになった。つまり、総合的アプローチとは、図の中の から をすべて視野に入れるものである。その中には、親を直接的な働きかけの対象とするものもあれば子どもへの働きかけを中心とするものもある。また、予防的な施策もあれば事後的な「治療的」な施策もある。さらに、現金給付やサービス給付の両方を含み、しかも、最低賃金制度などの「規制」や、母子生活支援施設や児童養護施設などのサービスを提供する「施設でのインケアとアフターケア」をも含む。つまり、「子どもの貧困」に対する総合的なアプローチとは、以下のAからDまでの性格の異なる施策を視野に入れた、文字通り、包括的なものである。

図1 子どもの貧困の経路・ステージと対応する施策

	親の貧困	子どもの貧困	子ども自身（への影響）
.....			
施策 予防			
.....			
施策 事後 ケア			
.....			

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

埋橋孝文、子どもの「貧困に負けない力」とレジリエンス、Int'l ecowk (国際経済労働研究) 1058、2016、7 - 16

矢野裕俊、子どもの貧困と自己肯定感、Int'l ecowk (国際経済労働研究) 1058、2016、17 - 24

郭 芳、日本における子どもの貧困、Int'l ecowk (国際経済労働研究) 1058、2016、17 - 24

山縣文治、子ども家庭福祉と子ども中心主義、子ども社会研究 21、2015、5 - 17

埋橋孝文「子どもの貧困」への総合的アプローチ、Int'l ecowk (国際経済労働研究) 1067、2016、7 - 15

田中聡子、社会福祉の対象と「子どもの貧困」、Int'l ecowk 1067 (国際経済労働研究) 2016、16 - 23

埋橋孝文、子どもの貧困と自治体調査、Int'l ecowk 1078 (国際経済労働研究) 2018、7-18

埋橋孝文、2016 年度学界回顧と展望 貧困・公的扶助部門、『社会福祉学』123、2016、92-103

〔学会発表〕(計 2 件)

埋橋孝文、日本における年金政策を振り返って、日中韓社会保障国際論壇 (国際学会) 成均館大学 (韓国ソウル) 2015 年 09 月 12 日

Takafumi UZUHASHI、Work-Welfare Foundation (招待講演) (国際学会) Child Poverty and Mother-led Lone Parent Family in Japan)、Seoul、2017 年

〔図書〕(計 3 件)

埋橋孝文・矢野裕俊『子どもの貧困/不利/困難を考える』272 頁、ミネルヴァ書房、2015 年

埋橋孝文・大塩まゆみ・居神浩『子どもの貧困/不利/困難を考える』261 頁ミネルヴァ書房、2015 年

山縣文治『子ども家庭福祉論』232 頁、ミネルヴァ書房、2016 年

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

埋橋 孝文 (UZUHASHI, Takafumi)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：60213427

(2) 研究分担者

山縣 文治 (YAMAGATA, Fumiharu)
関西大学・人間健康学部・教授
研究者番号：10159204

矢野 裕俊 (YANO, Hirotooshi)
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号：80182393

田中 聡子 (TANAKA, Satoko)
県立広島大学・保健福祉学部 (三原キャンパス)・教授
研究者番号：30582382

劉眞福 (YU, Jinboku)
プール学院大学・教育学部・講師
研究者番号：70708643

郭芳 (KAKU, Hou)
同志社大学・社会学部・助教
研究者番号：70755389

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()